

# VINYL JUNKIES

Vol.53

「究極! SP10用無垢キャビネットを作る」の巻

ヴィニジャン ~アナログの壺~

田中伊佐資

ある日の昼休み、シュンスケは編集部がある神楽坂界隈をふらふらとほつき歩いていたら「家具工房アクロージュファニチャー」の看板がふと目に留まった。吸い込まれるように外階段を上ってなかに入ると、2mを越す一枚板が十数枚も立て掛けてある。そこは無垢材にこだわったオーダーメイドの工房だった。

シュンスケは代表の岸邦明さんと顔見知りになる。編集部から近いこともあって頻繁に出入りするようになり、オーディオと無垢材の接点を模索していく。それがひとつの形になったのが、石田善之さんが設計した無垢材スピーカー、イシダモデルだ。「オントモ・ヴィレツジ」のウェブショップに販売を開始した途端、あっという間に完売した。その第二弾が、無垢材のオーディオボードである。昨夏、どんな樹種を採用すべきかをテーマにした試聴会を行なった(本誌2017年8月号参照)。

アメリカカンチェリー、サクラ、サベリ、ナラなど数種を同じ条件で聴いた結果、ある種の精彩を放っていたのがハードメイプルとブラックウォールナットだった。前者を敷くと鮮やかでヌケがよくなり、後者は中低音がラウド

になる。どちらもオーディオ的というより音楽的に気持ちがいい音になり、もうこれしかないかと僕を含めた全員の意見が一致した。

## 無垢のキャビネットを作る

さてこれから本筋に入る。僕は濃厚なブルース感を醸し出すブラックウォールナットのマジカルなパワーに魅了された。この素材を用いて愛用しているテクニクスSP・10MK3のキャビネットを作ってみよう。また虫が騒ぎ出した。

いまのキャビネットはテクニクス純正のSH・10B5で、これは同社オリジナル音響素材の一体成形である。コンクリートのようにカチンカチンで余計な響きを殺す方針をとっている。それもプレーヤーの設計思想の一部ではあるが、ここはひとつチャレンジしたい。なによりキャビネットが音に与える影響力にもかなり興味がある。レコードが回る。溝の情報カートリッジが酌み取る。いったいキャビネットはどう関係しているのか。

8月の下旬、アクロージュファニチャーへ出かけた。岸さんにはざっくり話をしていたので、ブラックウォールナットの一枚板がすでに用意されて

ブラックウォールナット一枚板の迫力と重量は圧巻



無垢を使ったオーダーメイド家具ショップ「アクロージュファニチャー」代表 岸邦明さんの男気によって、この無謀な企画がスタートしたアクロージュファニチャー ☎03-6265-0241 <http://www.acroge-furniture.com/>

いる。これがまたバカでかい。ざっと測って長さが2600、幅800、厚さ75mm。注文家具工房として、おそらく長テール用に仕入れたものだろう。「えっ、これ切っちゃっていいんですか」と畏れ多い感情しかわかない。岸さんの男気一発なしに、この計画はスタートしなかった。

「ブラックウォールナットはアメリカの五大湖周辺で伐採されています。板の原木は直径90cmくらいだったんじゃないですかね。日本に輸入されたのが10年くらい前。問屋さんの隅っこにずっと眠っていて、2年前に入れました。表面を見てください。縮み杓がたくさんあるでしょう」

縮み杓とは木目方向と直交するように表れる模様で、家具や楽器などの目立つ部分に使われる。ギブソン・レスポールの虎目ボディはまさにそれだ。といっても樹木としては、ある意味ひねくれた変種部分であり、人間が稀少性から価値を見いだしているにすぎないのだが。

おそらくこの個体が日本に来て十数年間も加工されなかったのは、この縮み杓が強烈すぎて使いづらい部分があったのではないか。申し訳ないというかもったいない気持ちを少しでも和ら

げるために僕は身勝手な解釈をした。

### 切断から完成まで

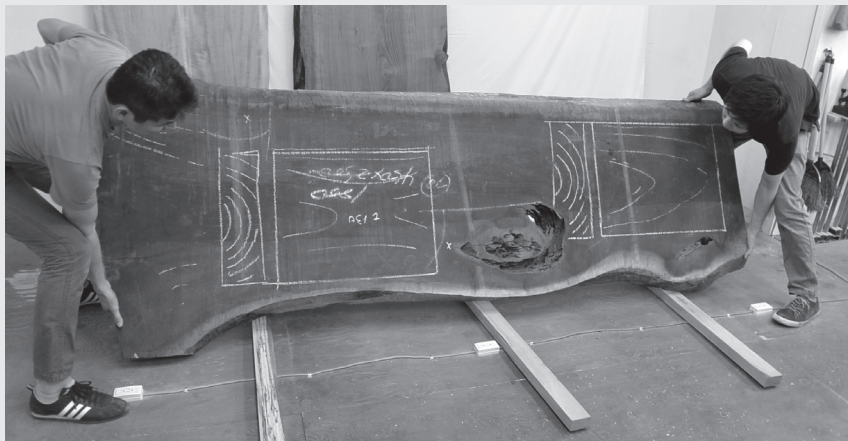
9月の半ば、再びアクロージュへ。いよいよ切断の日が来た。僕の希望するキャビネットの大きさは、幅600×高1550×奥行500mm。平面だが新聞紙や段ボールを切ってダミーを作り、ラックの上に乗せたとき見栄えがいいサイズをイメージした。

板は二枚重ねにする。しかし反りを是正する（水平にする）ため表面の切削を想定すると希望の高さに満たないことがわかった。こうなるとラックへバランス良く置くことはどうでもよくなり、えげつなく幅広い重厚長大主義に切り替わった。

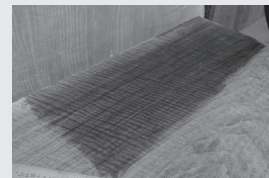
岸さんは無垢板のどの部分を採用するか、一枚の絵を鑑定するような目で吟味する。やがて「ここですね」とチヨークで四角く囲い、まさに大トロ部分を指定した。

ここから弟子の田山康平さんが加わり、電動丸ノコや昇降盤で切断していく。2枚の原型ができたところで、さらに手押しかなな盤で表面を整えていく。なんの迷いもないスピーディーな手際だ。

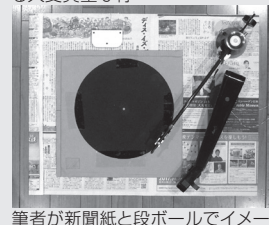
その2枚を重ねて、ようやくキャビ



アクロージュファニチャー工房でいよいよ切断へ。屈強な男二人がかりで一枚板を動かす



縮み杓は楽器の表面にも使用される大変貴重な材



筆者が新聞紙と段ボールでイメージした完成のサイズ



工房にある木工機械を駆使



白太（端の白い部分）をカット



まずは電動丸ノコで1枚板を3分割に



数量限定  
なのに  
売り切れ御免!  
大好評です!



アナログセット (LP)

▶4,630円+税

故・長岡鉄男氏が絶賛した「サウンド・ドキュメント 日本の自衛隊」の復刻版と、「富士総合火力演習」(45回転)の名盤LPセット。



長岡鉄男氏の  
スワンをルーツとした  
スリムなキット!

鳥形バックロードホーン・キット  
炭山アキラモデル「コサギ」

▶50,000円+税

6cmユニットOMP-600用に設計。  
板数1本35枚、8cmユニット交換  
用パッフル付属。音道は1.9m、  
W180×H900×D245mm。



別売ユニットを  
取り付けるだけ!

バスレフ型スピーカーボックス  
フォステクス OMF800P-E

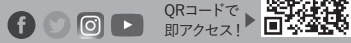
▶10,000円+税

フェイスプラグ付き8cmユニットの  
標準箱として設計。バナナプラグ対  
応金メッキターミナルなどを組み  
込み、音質調整済み。グリル付属。



Webサイト「オントモ・ヴィレッジ」  
<https://www.ontomovillage.jp>

✉village-shop@ongakunotomo.co.jp  
Tel.03-3235-2090 Fax.03-3235-2212  
(音楽之友社 編集部)



QRコードで  
即アクセス!

軽く水拭きすると、塗装後に近い色合いに変わった。鬼パンツのような無数の縞がめらめらと浮かび上がり、再び二人はのけぞった。

その1か月後、SP・10のモーター部を入れるためのくりぬき作業を行う。そのサイズと等しい穴をMDF板に空け、それをいわば型紙にしてブラックウォールナットに載せ切っ

ネット全体像を把握し「んー、これはスゲー」とシユンステと僕は目を輝かせた。一枚板は畏怖を感じさせるようなオーラを放っていた。だが板とオーディオはいまいち結びつかない。ここでやっとオーディオというエリア内に怪物ウォールナットが踏み込んできた。その規格外の存在感にたじろじとなったのである。

「ここで問題になるのが、板材がこれから動くかどうかです。穴を空けて、繊維が安定した状態は崩れましたので、急に反るかもしれない。そうしたら、これ以上反らなくなるまで放っておいてから削ります。ただそれが半年先になるかもわかりません」

岸さんはそう説明して、その日の作業は終了した。

1週間してから岸さんから連絡が入

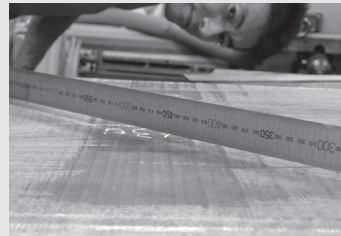
く。さりげないが難易度が高そうな技だ。

ここで初めてSP・10をマウントすることができた。キャビネットは紛れもなくいたずらに大きい。この段階ならまだカットして縮小できる。だが「俺を小さくするな」という闇からの叫びを聞いた気がした。

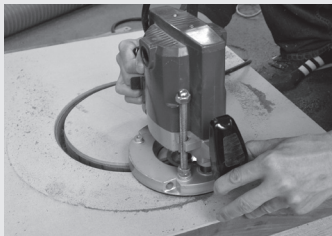
「ここで問題になるのが、板材がこれ



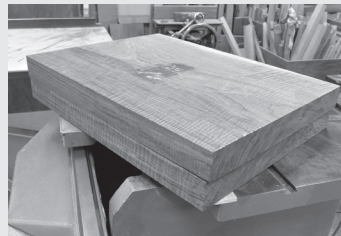
手押しかん盤で表面をフラットにする



無垢材では避けられない表面のソリ



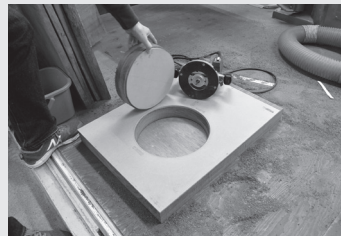
プレーヤーが納まる部分をルーターでくり抜いていく



キャビネットの全体像が見えてきた



SP 10-MK3をマウント。明らかに大きい。しかし、小さくはできなかった



くり抜き完了。これだけでも立派なプラッターになりそうだ



いよいよ筆者宅に納入。重すぎて一人では持ち上がらない! セッティングは4人体制で行なった



岸さんが製作したオール無垢スピーカー&ラック。音とモノとしての存在感。オーディオの価値観を揺るがされた魂の力作だ

る。「枯れていたのではほとんど反った様子がありませんね。2枚を接着して動きにくくします。一挙に完成させましよう。作業を進めます」

ところでアクロージュファニチャーはこの秋「神楽坂まち飛びフェスタ2017」に参加し、オール無垢材のスピーカー&ラック・セットを製作し展示した。オーディオ視点でスピーカーを作るのではなく、家具サイドからアプローチである。

それが出来上がったタイミングで、僕のキャビネットも数度のオイル塗装を終えて完成した。現物合わせをするために、SP・10は工房へ送ってあったので、フェスタの来場者にレコードを聴かせることができた。僕も最終日に聴きに行ったが、そのハイエンド・ファニチャー・オーディオの音が極めて奥深く、正直キャビネット単体の良し悪しはよくわからなかった。オーディオ的な、たとえばレンジの広さや解像度といった物差しではとても計りきれず、物の価値観や音楽観まで聴き手に問うているような音だった。

### 待望の納品

フェスタが終了して、いよいよキャビネットの納品である。岸さん、シユ

ンスケ、同僚の編集者モリヤもセットイングのヘルパーとして来てくれた。いままでまったく言及していなかったが、トーンアームはまだ決めていない。以前のままを踏襲するならクリア

オーディオのリニアトラッキング・アームになる。だがどうもムードが違う。ごっついヴィンテージ・アームなのではと思う。とりあえず、どんな状況でも必ずいい結果を出すViv Lab.のRigid Floatをセットしてみた。カートリッジは最近入手して以来、なにかと出番が多いシユアのM44・7(白ボディ)だ。

高校のときに買って40年近く所在不明で、この前たまたま納戸で見つかったアル・グリーンズの『ザ・ベル・アルバム』から「ラヴィング・ユー」を聴く。極端に支配的なベースとバスのラの低音がいい。カッティングはダグ・サックス。

僕が知っているSP・10MK3の音とは、ぜんぜん違った。モー、びつからこいた。音楽にビシッと揺るぎない太い骨格ができた。精度も上がった。無垢材でしか得られない耳にやさしい響きと同時に、パワーがみなぎった押し出し感もある。木の響きで輪郭が緩くなるなんてことはなく、

逆に鋭敏になった。

そこから金子マリ&バックスバニーのデビュー盤、ステイヴィー・ワンダー『トーキング・ブック』、ウイントン・ケリー『ケリー・ブルー』などを脈絡なく聴いていくが、どれも格段にいい。

スピーカーを構成するうえでユニットとエンクロージャの重要度は互角。同じように、レコード・プレーヤーもまたターンテーブルとキャビネットは互角であることを知った。これでSP・10がRCAのギアドライブとまともに渡り合えるようになった。さて、これからアームをどうするか。



今後、このプレーヤーはどのような運命をたどるのか…。ちなみに材料費と製作費合わせて30万円くらいだ(樹種やサイズによる)